

研究ノート

日本語教師の実践的コミュニケーション能力養成の 課題と展望

— 実習生の教育実習に観察された事例から —

Issues and Prospects for Developing Practical Communication Skills in Japanese Language Teachers: Based on Cases Observed in a Student Teachers' Teaching Practicum

嶋津 百代

Momoyo Shimazu

松浦 とも子

Tomoko Matsuura

This report introduces activities conducted during a Japanese Language Teaching Practicum, which is a component of a Japanese Language Teacher Training Program. It also attempts to consider how practical communication skills—one of the essential competencies listed under the skills required of Japanese language teachers—can potentially be developed during the teaching practicum. This practical communication skill is crucial for teachers themselves to generate communication in practice, whether in managing and administering lessons, building relationships with learners, or, most importantly, enabling learners to acquire communication skills in Japanese. Keeping this in mind, this report introduces several examples drawn from students' classroom observation reports, their practicum lesson contents, and reflection reports completed as part of the Japanese Language Education Practicum offered at Kansai University's Faculty of Foreign Language Studies in 2024. We aim to use this report as a starting point for proposing practical activities that will help the practicum students themselves become more conscious of practical communication skills.

キーワード

日本語教員養成、実践研修、実践的コミュニケーション能力、意識化

1. はじめに

文化審議会国語分科会が2018年に公表し、2019年に改訂された『日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)』(以下、『2019年報告』)によって、大学などの教育機関における日本語教員養成課程は大きな動きを見せた。また、2024年4月より登録日本語教員の国家資格制度が施行され、同時に登録日本語教員養成機関や登録日本語教員実践研修機関などの申請も開始され、日本語教員養成課程の教育内容の再検討やカリキュラムの再編成が行われるようになった。

これらの日本語教育施策の背景には、昨今の日本語学習者の増加を受けて、日本語教師の質の向上、ひいては日本語教育の質の担保が喫緊の課題となっていることがある。このような動きの中で、養成課程における教育実習の重要性が高まり、その位置づけが明確にされた(文部科学省日本語教育部会, 2024)。現在、実践研修と呼ばれることになった教育実習では、養成段階の実習生に求められる資質・能力のうち、「技能」と「態度」を育成することが求められている。

嶋津(2021, 2024)では、日本語教師が持つべき「技能」の1つとしての「実践的コミュニケーション能力」がこれまで検討されてこなかったことを指摘し、実践的コミュニケーション能力の捉え方とともに、実践的コミュニケーション能力が必要とされる具体的な場面や状況を取り上げている。授業を運営・管理する上でも、学習者との関係を構築する際にも、そして、何よりも学習者自身が日本語でのコミュニケーション能力を獲得するための環境を提供するためには、教師自身に実践の場でコミュニケーションを生じさせる力が求められる。

このような問題意識から、本稿は、関西大学外国語学部で開講されている「日本語教育実習」で、2024年度春学期の実習生が残した授業見学の報告や模擬授業の内容、振り返りレポートなどから、実践的コミュニケーション能力が垣間見える事例をいくつか紹介する。これらの事例を足がかりに、実習生自身が「実践的コミュニケーション能力」を意識化できる実践活動の提案につなげたい。

2. 日本語教員養成における実践研修の位置づけ

2.1 登録日本語教員実践研修・養成課程コアカリキュラムについて

『登録日本語教員実践研修・養成課程コアカリキュラム』(文部科学省日本語教育部会, 2024; 以下、『コアカリキュラム』とする)には、『2019年報告』の内容を受け継ぎ、登録日本語教員として求められる資質・能力が示されている。これらの資質・能力を養うために、「登録実践研修機関および登録日本語教員養成機関でそれぞれ実施される実践研修や養成課程において共同的に学習・習得が必要な内容を「登録日本語教員実践研修・養成課程コアカリキュラム」とす

る」(p.3) ことが明確にされた。コアカリキュラムは、「実践研修コアカリキュラム」と「養成課程コアカリキュラム」で構成されているが、本稿は「実践研修コアカリキュラム」について簡略を説明する。

『2019年報告』で提示された「必須の教育内容」50項目のうち、「教育実習」は「実践研修」に名称が変更され、『コアカリキュラム』では「実践研修コアカリキュラム」の内容に該当するものとされた。また、実践研修は「日本語学習者の学びと受講生の学びが両立するよう十分に配慮した上で行うこと」、そして、「養成課程修了見込み者が実践研修を受けるためには、必須の教育内容 37 項目について最低限必要な学習がなされていることを要件」とすることが求められている（文部科学省日本語教育部会, 2024, p.4）。

『2019年報告』では、「教育実習」において、以下の6つの学習項目を全て含めることが明示されている。この内容は『コアカリキュラム』の「実践研修コアカリキュラム」にも踏襲されている。冒頭でも述べたように、実践研修では、これらの教育実習経験を通して、養成段階で求められる資質・能力のうち、「技能」を身につけるとともに、「態度」を養うこととされている。

(1) オリエンテーション

実践研修全体の目的・目標を理解し、日本語教師として求められる資質・能力と実践研修がどのように関わるか理解している。

(2) 授業見学（教壇実習の場となる機関の授業の見学を含むもの）

授業の流れ及び学習者や教師の様子を観察し、授業を分析することができる。

(3) 授業準備

教壇実習の場となるプログラムやコースのカリキュラムを踏まえて、授業で扱う内容を理解し、学習者の学びを計画するとともに、その実施のために必要な教材・教具等を準備することができる。

(4) 模擬授業

授業計画や教材・指導方法などの妥当性を検討するために、模擬授業を実施し、振り返りや改善を行うことができる。

(5) 教壇実習

単独で教壇に立ってクラス指導を行うとともに、授業を客観的に分析し、改善を図ることができる。

(6) 実践研修全体総括（振り返り）

日本語教師として自律的に成長していくために、実践研修全体を振り返り、内省することができる。

（文部科学省日本語教育部会, 2024, p.6）

本学部で開講されている「日本語教育実習」は、1学期間15週(週1回)の授業と、授業見学や教壇実習(1人45分×2回)が行われ、この6段階に即して進められている。

2.2 実践研修コアカリキュラムと実践的コミュニケーション能力とのかかわり

『2019年報告』には、「日本語教師【養成】における教育実習とは、日本語学習者を想定して行う実際の指導及びそれに関連する授業のことを指す」(文化審議会国語分科会, 2019, p.46)とある。したがって、『2019年報告』を踏襲した『コアカリキュラム』で説明されている「実践研修」も、大学や日本語学校などに属する留学生に対する授業での教育実習を意味する。

また、『2019年報告』では「専門家としての日本語教師に求められる資質・能力」が具体的に定義されていたが、『コアカリキュラム』の冒頭でも、以下のように紹介されている。

- (1) 言語教育者として必要とされる学習者に対する実践的なコミュニケーション能力を有していること。
- (2) 日本語だけでなく多様な言語や文化に対して、深い関心と鋭い感覚を有していること。
- (3) 国際的な活動を行う教育者として、グローバルな視野を持ち、豊かな教養と人間性を備えていること。
- (4) 日本語教育に関する専門性とその社会的意義についての自覚と情熱を有し、常に学び続ける態度を有していること。
- (5) 日本語教育を通じた人間の成長と発達に対する深い理解と関心を有していること。

(文部科学省日本語教育部会, 2024, p.1)

上記の(1)にあるように、「言語教育者として必要とされる学習者に対する実践的なコミュニケーション能力を有していること」が、「専門家としての日本語教師に求められる資質・能力」の1つとして明示されている。『2019年報告』には「日本語教育とは、広い意味で、コミュニケーションそのものであり、教授者と学習者とが固定的な関係でなく、相互に学び、教え合う実践的なコミュニケーション活動と考えられる」(文化審議会国語分科会, 2019, p.18)という記述があり、「コミュニケーションを通じてコミュニケーションを学ぶ」ことが、日本語教育の基本的な教育理念とされている。そのため、学習者がコミュニケーションを学ぶための環境を提供すること、言い換えれば、授業内でコミュニケーションを創り出す力量のある教師が求められているとも言える。しかし、嶋津(2021, 2024)でも指摘されているように、授業内でコミュニケーションを創り出す日本語教師自身のコミュニケーション能力についての議論は少なく、これまでの研究においても、教育実習において実践的コミュニケーション能力をどのように育成するかは、十分に検討されてこなかった。実践的コミュニケーション能力を「技能」として身につけることが、『2019年報告』で明記されている以上、どのように実践研修で取り

組むかが課題となる。

3. 日本語教育実習生の教育実習に観察された事例

ここから、関西大学外国語学部の「日本語教育実習」において、実習生によって「実践的コミュニケーション（能力）」に対する気づきがどのように示されているかを、具体的な事例とともに紹介する。なお、登場する実習生の名前はすべて仮名である。

3.1 実習生による授業観察レポートから

関西大学外国語学部の「日本語教育実習」生は、留学生別科で授業見学を行う。2024年度春学期の実習生の1人、佐々木さんが提出した授業見学の報告レポートから、見学した授業中の教師と学習者のやり取りにおいて、具体的にどのような点に注目していたのかを説明する。佐々木さんは授業見学中に気づいたことを、以下のように報告レポートに残している。

〈例1〉

学生が答えに詰まってしまい、ヒントを出しても活動が進まなくなったら「こういう時はどうする、みんな？」と言って、他の学生に答えを出させていた。他の問題では、ある学生が言った答えの誤りを、他の学生がすぐに訂正していた。ある時は「みんな、これは何が違う？」と全体に聞く。ボソッと正解を言った学生に「お、何て言った？」と言ってフォーカスを当てていた。

〈例2〉

（教師は）机間巡視で質問を受けたり間違いを指摘したりする。面白い解答には「めっちゃ面白いじゃん！」とか感想も言っていた。かなり「??？」となる解答があった。割り込んで答えようとする学生には「ちょっと待って」と笑いながら言って、この解答をした学生にどういう意図でこの解答をしたのか説明させていた。「こう考えてこの答えになったのね、それならここがおかしいから通じない文になってるよ」と教えたうえで同じ学生に再チャレンジさせる。

〈例3〉

練習問題の時に明らかにサボってスマホを触っている学生がいた。その学生には「何調べてた？」「それは分かりましたか？」と言って遠回しに追求していた。答え合わせの時、学生の答えに関したおしゃべりを挟んでいた。あまり直す必要がなかったので早めに終わったからかもしれない。

〈例4〉

例文の説明に入る前に「今から話す話、本当の話だからね!」と言って楽しい話をして注意をひいていた。意味のあやしい文を作った学生には「何がおかしいのか」「何かおかしいということ自体」を気づかせる。漢字の読みがあやしくてごまかすように発表した学生にはもう一度しっかり言わせて訂正していた。「文はいいのに!」と言ってフォローもする。

以上の例1～例4に見られるように、佐々木さんは、教師が「文法をどのように説明しているか」よりも「教師がどのように学生とコミュニケーションを生じさせているか」に注目している。この「授業見学」の段階では、実習担当者によって「学習者に対する実践的コミュニケーション能力」についての説明はなかった。しかし、実習生の中には、佐々木さんのように、教師がいかにして学習者とのコミュニケーションを創り出しているかを、また、教師がコミュニケーションを生じさせたり展開させたりするのにどのような発話が行われているかを観察している実習生もいた。教師が授業内で生じさせているコミュニケーションに、このような授業見学を通して実習生が注目している例として挙げておきたい。

3.2 模擬練習における「実践的コミュニケーション」の導入と事例

次に、実践的コミュニケーションへの意識化を図った模擬練習を紹介する。なお、嶋津 (2021, 2024) に倣い、「学習者に対する実践的コミュニケーション」を、教室内あるいは授業中における教師と学習者とのやり取りに限定する。また、嶋津 (2021, p.74) では「実践的コミュニケーション能力」が必要とされる場面として、(1) 授業運営に関わる場面、(2) 特定の活動が行われている場面、(3) 学習者への対応が必要となる場面、(4) 雑談が行われる場面の4つの場面が挙げられている。そのうち、本稿で取り上げる「模擬練習」では、実習担当者は(2)の「特定の活動が行われている場面」を取り上げ、学習者に対する具体的なやり取りを導入していた。この「特定の活動が行われている場面」は、一斉授業や個人・ペア・グループ活動など、教師によって計画された教室活動が行われている場面である (嶋津, 2021, 2024)。この場面では、教室活動の内容に関わる質問や確認、学習者の発話に対するフィードバック、あるいはペア活動やグループ活動などで、学習者同士のやり取りが活発になるように、教師が介入することも含まれる。

この模擬練習の前に、実習担当者から「実践的コミュニケーション能力」に関する事項として、まず、授業とは、「学習者との関係性を構築する中で、コミュニケーションを通じてコミュニケーションの技能を発揮していくための教育実践である」という説明があった。そして、以上で述べたように、「授業時の問いやフィードバック、個人・ペア・グループ活動中の机間巡視時の声がけ、活動から活動へと移行する時の授業運営に関する説明、学習者同士のやり取りが活発になるような介入」に焦点が当てられた。

ここでは、文法事項に関する教室活動を行うことを仮定し、実践的コミュニケーションの中でも、教師によるフィードバックに焦点化した意識化の活動を提示する。実習担当者は、実際の教壇実習で以前の実習生がつまずいたり、とまどったりした例を記録に残しておき、この模擬練習に使用した。学習者の回答に対してどのようなフィードバックの方法があるかを知識として知っていても、実際に対応できない場合が多いからである。

実習生が実践的コミュニケーションについて意識し、的確なフィードバックができるようになるために、実際の教壇実習での実習生のつまずきを素材とし、実習生が教師役と学習者役に扮してロールプレイを行った。ロールプレイは、①以前の実習生が作ったスライドを使用し、スライドには（ ）内を埋める練習問題が提示される、②学習者役は、正答する人・誤答する人・沈黙する人を担い、それぞれのロールカードが配られる、③教師役にはシナリオはなく、また学習者役のロールカードの内容も知らされず、学習者役の回答に対して自分で考えてフィードバックをする、という手順で行われた。

以下の表1は、実習生同士のロールプレイの内容の一例である。

表1 実習生同士（教師役と学習者役）のロールプレイの内容

ロールプレイ① 「たとえ～でも」 教師の質問 「みなさんは、どんな家に住みたいですか？「たとえ～でも」を使って考えましょう」	学習者の 応答例	たとえ（スーパーから遠く）でも、家賃は安いほうがいい。	正答
		たとえ（貧しく）でも、駅から近い家がいい。	誤答（→古くても）
		たとえ（ご飯を食べ）でも、お腹がすく。	誤答（→ご飯をたくさん食べても）
ロールプレイ② 「～はず」 教師の質問 「（ ）の中に適切な動詞を入れて、文全体を読んでください」	学習者の 応答例	彼はイギリスに留学していたから、英語が（話せる）はずだ。	正答
		今日は日曜だから銀行は（閉まる）はずだ。	誤答（→閉まっている）
		Aさんは出張に行っているから、今日は会社に（・・・）はずだ。	沈黙

まず、学習者が正しい答えを述べた場合には、「ほめる」という対応がある。その場合、「ほめことばを伝える」か、「具体的にどこが正しいのか、よかったのかを説明してほめる」か、「拍手をする」か、「話題に関してさらに問いかける」か、さまざまなやり方がある。最後の「話題に関してさらに問いかける」ことは、一般的な事柄を個人的な事柄に志向させること（個人化）も、実践的コミュニケーションを生じさせることになる。

次に、学習者が間違った答えを述べた場合である。例として、「教師が正答を言う」ことがよく行われる。その場合も正答を伝えるだけにするか、クラス全体に「わかる人、いますか」のように問いかけ確認するか、他の学習者を指名するか、あるいは、間違った理由や文型の要点を説明するか、などの方法がある。

そして、学習者が答えられなかった場合である。学習者が沈黙しているのは、教師の質問の意味を理解していないか、何を言うべきか考えているか、答えがわからない、などの理由が考えられる。「教師の質問の意味を理解していない」と判断すれば、「もう一度質問を繰り返す」ことができるし、「何を言うべきか考えている」様子であれば、「あらかじめ考える時間を十分に与えたり」、「ペアで考えさせる」こともできる。さらに、「答えがわからない」という発言があれば、「教師が正答を言う」か、「わかる人、いますか」のように問いかけるか、あるいは他の学習者を指名するか、などの方法が一般的であろう。

以上のような簡単なロールプレイの後、実習担当者から、このような教師によるフィードバックにおいては、「学習者の理解を確認しながら例を示す」ことや、「間違わせない（誤解させない）ような工夫をする」こと、「学習者が間違った場合、どうして間違っているかをシンプルに説明する」こと、しかし「説明が長くなると聞き取れないので、注意が必要」などの説明があった。

教師によるフィードバックは、まさに実践的コミュニケーションの基本であり、教育実習の過程で、これらのロールプレイを事例として紹介し、体験してもらうことで、指導経験のない養成段階の実習生でも授業中の学習者とのコミュニケーションを具体的にイメージできるようになると思われる。

3.3 教育実習後の振り返りレポートから

最後に、「日本語教育実習」の実習生の振り返りレポートから、「実践的コミュニケーション」に対する意識化が述べられている箇所を、いくつか抜粋しておく。なお、下線部は筆者によるものである。

〈遠藤さん〉

1 回目の実習授業同様、生徒が手をあげる前に私が指名してしまうことが多かったのもあまり改善できず反省点になりました。同じ日に授業をした小西さんは誰かが挙手をするまで待つ場面が多くみられたからこそ、受動的な雰囲気になってしまったのかと思います。そして細かい改善点ですが、文法事項を説明する場面で、1人を除いてクラスのほとんどの生徒が理解できているような雰囲気でした。当初の教案通り私が説明しても良いのですが、分かっている生徒に説明を促すとより良かったのではないかと思います。

〈中西さん〉

(略)最後に、期待していない回答が出たときの対応、という今後の課題について述べる。これは、私自身やりがちなことだったが、あまり意識していなかったのご指摘いただいたことに感謝している。改善策としては、まず、生徒が混乱してしまうような指示や

説明をしている場合があると思うので、前提としてそれが起こらないように学習者目線に立って自身の教え方を振り返るようにしたい。加えて「学習者に完璧を求めない」ことを意識したい。私自身完璧を求めてしまう性格なのだが、同じように学習者を見ることは単なる押しつけになってしまう。「誰も完全ではなく途上であり、だからこそ学ぶのだ」という心を持っておきたい。そして、学習者から出た言葉をもっと貴重扱い、もっと褒めたり、生かしたりできたらと考える。

〈松下さん〉

机間巡視ではビクビクしてしまって、ただ見て回っただけになってしまったので反省しています。学習者の反応や行動を見る余裕がなかったのも非常に悔しいです。前で一方的に話しているだけにはなりたくないと思っていましたが、実際にやってみると、自分が用意してきたものを披露することに精一杯といった感じになってしまいました。今後は学習者とコミュニケーションがとれるようになることを目標にしたいと思います。自分のことで精一杯になってやりとりができなかったのが悔しかったので、余裕を持てるようになりたいです。それには慣れも必要なのですがすぐに達成できるものではないですが、意識的にできることとして区切りながら話すことを徹底したいと思います。説明が流れてしまうというのと、学習者の様子を見る余裕がないという2つの問題を改善しやすくなるし、意識で変えられる部分だと思うので次はそれをやっていきます。

〈森川さん〉

実習で難しいと感じたことは、やはり自分が予想していたものと全く違う答えが返ってきたときに、あわててしまうことです。生徒が返答したものが間違いではないのに、予想していたものと違ったため焦ってしまい、しっかりと生徒に良いフィードバックができなかったことが悔やまれます。また、生徒の解答に対して、生徒がどのように解釈したためその答えに行きついたか理解することができなかったため、どう訂正すべきか分からなかったことがあったのでそこも反省すべき点だと思います。次回からは、用意している答えだけでなく、他にどのような回答が予想されるかまで事前に準備して、それが誤答でも正答でもどのような返しが教師としてできるかを落ち着いて考え、より適していかつ生徒にも理解してもらえるような返答ができるようになりたいです。

以上のように、教育実習を終えた実習生らは、それぞれの実習体験を通じて、自身の取り組みや学習者とのやり取りについて振り返り、「実践的コミュニケーション」への気づきを示している。このような実習生らの気づきは、日本語教師としてのコミュニケーションのあり方に寄与するものであるだろうし、実習の意義をあらためて感じさせるものであった。

4. おわりに

本稿では「日本語教育実習」において、実践的コミュニケーションに関する実習生の気づきや、模擬練習における実践的コミュニケーション（能力）の説明や事例などを紹介した。本稿で紹介した事例からは、実践的コミュニケーションに対する意識化を図る模擬練習を通して、実習生が実践的コミュニケーション能力を獲得したかどうかまでは判断できない。しかしながら、少なくとも実習生らの模擬練習においては、学習者とのコミュニケーションをいかに生じさせるかを経験したことが窺え、実習後の振り返りレポートにおいても、各自が実践的コミュニケーションについて何らかの気づきを得ているようにも思われる。

実践研修は、今後、日本語教育の現場に参入していく教師候補生である実習生に、授業場面でのさまざまな出来事を経験する機会を提供する。実践研修には、『コアカリキュラム』で示された「必須の教育内容」で学んだ知識と、現場で求められる技能や態度を身につける実践をつなぐという課題が課せられている。そのためにも、本稿で取り上げた活動のように、教師の実践的コミュニケーション能力に特化した活動を実践研修の中で取り入れていくことが重要であると思われる。そうすることで、『2019年報告』や『コアカリキュラム』に示されている教師の「実践的コミュニケーション能力」育成の必要性に応えていくことができるであろう。

参考文献

- 嶋津百代 (2021) 「日本語教師の実践的コミュニケーション能力に関する覚書」 関西大学外国語学部『外国語学部紀要』第25号, pp.69-77.
- 嶋津百代 (2024) 「教室内インターアクションにみる日本語教師の実践的コミュニケーション能力」 古川智樹 (編) 『ポスト・コロナ時代の留学生教育— 関西大学留学生別科の挑戦と展望』第11章, pp.213-231. 関西大学出版会
- 文化審議会国語分科会 (2019) 『日本語教育人材の養成・研修の在り方について (報告) 改定版』 https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/r1393555_03.pdf (2025年11月20日検索)
- 文部科学省日本語教育部会 (2024) 『登録日本語教員 実践研修・養成課程コアカリキュラム』 https://www.mext.go.jp/content/20240321-ope_dev02-000034812_4.pdf (2025年11月20日検索)